

— 下肢静脈瘤とは  
脚の血管には、心臓から血液を送る動脈と心臓へ血液を返す静脈があります。静脈が動脈と通じるところは、血管の中に弁がたくさん配置されているのです。この静脈弁は、血液を心臓に返す方向だけに開くようになっていますが、下肢静脈瘤は静脈の弁が壊れて閉まらず、血液が足先に向かって逆流することで起こります。

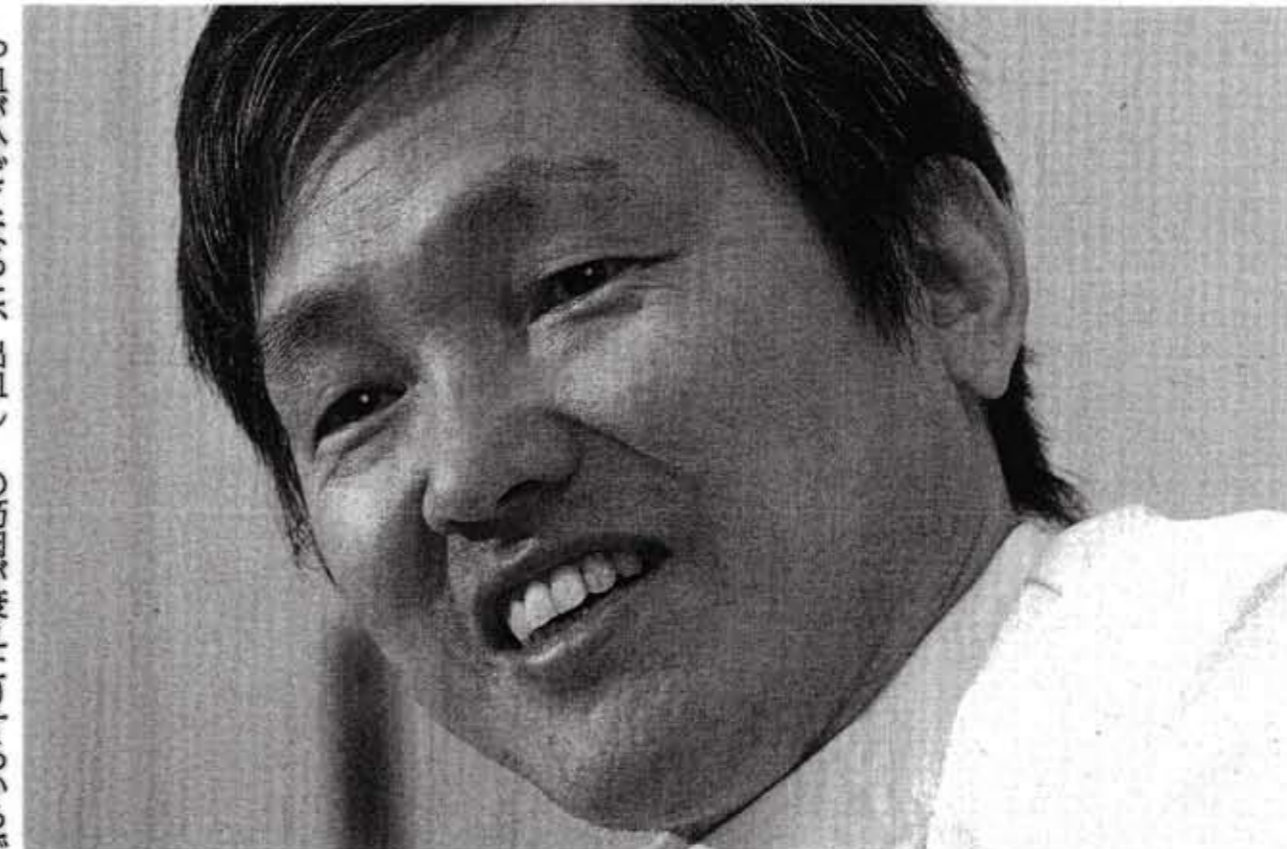
— どんな症状がありますか  
WHOの定義ですと「脚に静脈がぼこぼこ浮いている」といのが下肢静脈瘤です。

坂田血管外科クリニック  
坂田雅宏院長に聞く

脚がだるい、むくむ、血管がこぶのように盛り上がるなどの症状がある「下肢静脈瘤」治療に大きな変化が起きている。

超音波（静脈エコー）を使う診断技術の進歩と、手術法や麻酔法の改良などにより日帰り治療ができるようになったこと。さらに今年から一部のレーザー治療に健康保険が適用されるようになったことなどがある。

下肢静脈瘤の治療症例を多く持つ坂田血管外科クリニックの坂田雅宏院長に話を聞いた。



— 年齢との関係は  
20代は20%、70代は70%かかるという研究発表があります。年齢が高くなるにつれて静脈弁の老化が進んだり、脚

— 治療の方法は  
まず超音波検査機器（静脈エコー）で、どの血管がどの場所まで血液が漏れているかを調べ、治療計画を立てます。超音波検査では痛みもなく詳細に静脈瘤を調べることができ、また検査は誰にでもできるわけではなく、豊富な経験が必要です。

治療は大きく分けると、3つあります。1つは手術療法。これには壊れた静脈を抜き去るストリッピング手術や、血管をこめるだけの結紮術、レーザー治療や高周波治療などがあります。

ストリッピング手術の長所は、治療効果が長持ちすること。静脈瘤になつている血管を取り去り、正常な血管だけ残しますから、再発が防げます。昔は術後2週間は痛くて歩けませんでしたが、今は麻酔技術や医療技術の進歩で日帰りができるようになりました。

2つ目は硬化療法。手術が必要でない軽症の静脈瘤の場合に、血管に硬化剤を注射して治します。色素の沈着と多少の痛みがあり、治療に時間がかかります。

3つ目は、医療用弾性ストッキングで脚を圧迫する治療。脚の表面の静脈を圧迫して逆流を減少させたり、静脈の血管を広げないようにします。しかし、心臓病の人や動脈が詰まっている人などには使えません。実際の治療は、3つの治療法を組み合わせて行いますので、専門医に相談してください。

— 下肢静脈瘤の種類は  
っ血がひどくなると、出血して色素が沈着したり、皮膚炎になったりします。

脚がだるい、むくむ、血管が浮く…  
「下肢静脈瘤」治療に大きな変化



さかた・まさひろ 昭和62年神戸大学医学部卒業。神戸労災病院、住友病院心臓血管外科勤務を経て、平成21年大阪市中央区北浜に坂田血管外科クリニック開院。医学博士。日本静脈学会評議員。



「最近の日帰り手術も可能になりました」と話す坂田院長

— 治療の効果は  
下肢静脈瘤は良性の病気のため、脚がだるくて疲れても5年、10年と我慢している人は多い。ところが治療を受けられた患者さんは、つらかった階段がさっさと上がれるようになります。

— 治療の予防は  
長時間立ち仕事をする人は、医療用の弱圧の弾性ストッキングを履くと予防できます。脚の疲れも取れて軽くなります。

「ご存知ですか？」 下肢静脈瘤

多くの女性を悩ませている下肢静脈瘤は、どうして起こるのでしょうか？あんなに長いキリンは下肢静脈瘤にならないのでしょうか？

答えは、足の静脈と心臓の位置関係から説明できます。もともと四足であった人間は、地上生活に順応するために二足歩行を適ひました。四足の場合、手と足



兵庫県立大学大学院教授  
志田 力

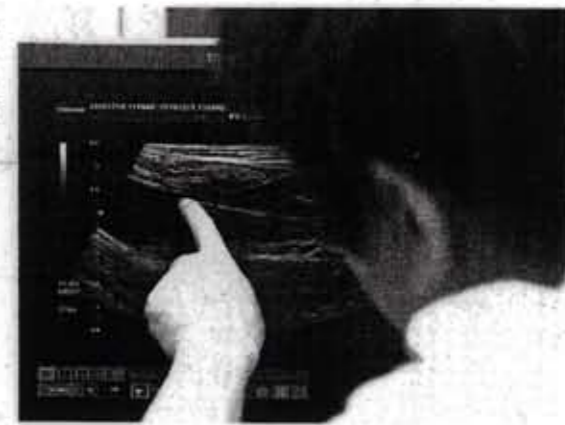
— 一方、立位（二足）の場合、足から心臓までの距離が延び、足の静脈に大きな負担がかかります。また、足の血液を心臓に効率よく戻す仕掛けとして、静脈には多くの弁があり、血液の逆流を防いでいます。しかし長時間の立ち仕事、力仕事から心臓までの高さはそのほとんど大きくなると、下肢静脈瘤にはなりません。

長時間の立ち仕事の調理師、理容・美容師がかかりやすい

— 実際、どのような人々が下肢静脈瘤にかかりやすいかを調べたところ、職業では調理師、理容・美容師が多かかかっていました。そしてこれらの方々は、皮膚

— 病変を合併した進行例が多いのも特徴的でした。なお妊娠は下肢静脈瘤の誘因にはなりませんが妊娠回数と関係があるかないかに関して、わかりませんでした。さて、下肢静脈瘤というても軽症から重症までいろいろな状態があります。しかし患者さんにとっては、毎日見るため、とても気になる病気と言えます。近年、治療法の選択肢が増えており、気になる方は専門医の受診をおすすめします。

— したつとむ 兵庫県立大学大学院教授、兵庫県立姫路循環器病センター名誉院長。昭和43年神戸大学医学部卒業。神戸大学講師、神戸労災病院心臓血管外科部長、兵庫県立姫路循環器病センター院長を経て現職。日本循環器病学会専門医。



超音波検査画面を見ながら、治療箇所を説明

注目のレーザー治療  
今月から保険適用開始

以前から下肢静脈瘤の治療法とされていたレーザー治療だが、今年1月から、薬事認可された機器を持ち、所定の研修を終了した医師が施術する病院での治療に、健康保険が適用されることが決まった。

下肢静脈瘤のレーザー治療では、血管にカテーテルを入れ、その中に光ファイバーを通し、レーザー光線を当てる。そして静脈瘤になった血管を内側から焼いて閉塞させる。カテーテルは、切らずに小さな穴を



レーザー治療に使用される医療機器。細い光ファイバーの先からレーザーが射出される

開けるだけなので患者の負担は少ないが、膝から下の手術には使えないなど注意点もある。また、薬事認可されているレーザー機器は台数が少なく、導入している病院もまだ少ない。すべての病院で保険適用が実施されているわけではないので、注意が必要だ。

まずは、症状や状態などを把握した上で、専門医に相談することが第一だろう。

し、脚を出すのも気にならなくなる。脚が軽くなると心も軽くなるよつで、顔がパツと明るくなります。あきらかに「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」が向上しているのです。安心できる専門医を選んで治療し、一度きりの人生を足どり軽く楽しんでほしいですね。